愛知県埋蔵文化財センター
研究紀要　第 11 号
2010.3
37-50p.

「貝田町式土器」生成論

石黒立人

貝田町式は、西の「櫛描紋」、東の「条痕紋」とは異なる明確な地域性をもって成立し、伊勢湾岸域の弥生中期中葉を特徴づけている。それを弥生文化の３要素になぞらえれば、東西両系に対する「独自系」となり、型式学的には「折衷型」に重点を置くことになる。今回は紋様に絞って具体的に生成過程を検討した。

濃尾平野の朝日遺跡周辺において、中期前葉の朝日式２期の櫛描紋要素と岩滑式３期の条痕紋要素を中心にして、その他の要素を含めた相互影響と型式学的変異が多産される状況が生まれた。それが再編される過程の中で、直接には条痕紋系に起源をもつ「付加沈線研磨手法」が貝田町式の紋様構成を規定する形制が成立した。「付加沈線研磨手法」によって施される紋様は朝日遺跡では黒色焼成の精製土器群（各種壺と鉢等）に採用され、同時に細頸壺を除いては同種の土器が周辺地域で広く共有されることが無いという特種な状況も生まれた。よって「貝田町式」とは〈斉一性〉とはほど遠い、斑状の濃淡を内実とする型式であることがより鮮明になった。

Ⅰ はじめに

紅村弘は半世紀前に、遠賀川系土器と条痕紋系土器の並行推移が濃尾平野における弥生土器成立期の要点であると述べ、その他の諸類を含めた多系の共存と相関を型式変遷に導入した。その後、わたしは 20 年前に阿弥陀寺遺跡の弥生中期土器を材料にして共存・相関を超える技術的な交流を実証するのが折衷型土器であること、次ぎには十数年前に紅村の提言を折衷型土器でなぞったことがある。突帯紋系土器が遠賀川系土器に交代して衰滅すると単純に済ますのではなく、細くはあっても並存して推移する連続の探索を始めた紅村の構想に添うことが、結局は折衷型土器への注目を召還し、対峙を迫るのである。いや、そもそも土器相の微細な変遷の把握とは折衷型土器への注目によって初めて可能になると言うべきかもしれない。

ところで、もともと弥生文化の３要素である大陸系、縄紋系、独自系を読み替えれば外来系、在来系、折衷系となるのであり、弥生土器にも適用できる分類である。したがって、弥生土器の生成・展開において在来系土器・外来系土器２系譜の並存を認めるだけでは不十分であり、折衷型土器への注目も必要である。ただ、折衷型土器は定型化しない一過性の存在（量的にも不安定）と看做されているために、一部の注目を引きつつも、十分に議論されて来なかったという経緯がある。

折衷型土器は型式組列の過程中に微かな“点”として非明示的に存在するのみで、定着・反復しないことから組列における明示的な位置を占めない異端である。“型式”を占めるべく反復しないゆえに、「様式」においてはそれを構成する「型式」と認定されないし、『型式』においても同様である。しかし、よくよく考えれば、一つの表現形が長期にわたって変化しないはずはなく、とりわけ紋様では要素の離合集散による複合・編集、複雑化・簡素化等が進行し、一つの紋様が安定して継続することは無いのではないか。紋様に対してどのような対応をするのか、その違いが折衷型土器の評価にも表れているのだが、必要なのは往々にして吐露される研究者の嗜好に添うことではなく、折衷型土器が生み出される構造の方法的な解明を「型式学」として図ることである。

折衷型土器とは異系統の関係をありのままに示す縦横関係の要である。しかも、強固な系統の間を埋める単なる派生ではなく、両系の距離の遠近を示し、また時間経過の中でも生み出され、かつ回収される動態としての不連続な変遷

を繰り返し、土器環境の全体性を構成するものであることも窺われた。これによってわたしは濃尾平野の弥生中期土器である朝日式→貝田町式→凹線紋系土器への変遷を把握したが、これまでの論述はあくまで年代区分に重点を置いたもので、型式学的な分析は不十分であったし、いまだそれぞれの生成と展開の連鎖を型式学的に明らかにはしていないという反省点がある。

本稿では長年の宿題に答えるべく、まずは貝田町式に焦点を絞って、どのような経緯から固有の型式的特徴が生成したのかを考えてみることにしたい。甕についてはすでに示したことがあり、その意味で本稿は壺を軸とする紋様篇となる。

Ⅱ 弥生中期前半土器の概要

1. 朝日式１期（あるいは貝殻描紋土器）、そして朝日式２期（あるいは櫛描紋土器）

遠賀川系土器から貝殻描紋土器（朝日式）への交替が前期土器と中期土器の境界と考えられている。濃尾平野周辺以東では条痕紋系土器（岩滑式：西部は二枚貝条痕、東部は櫛条痕）が存続する。

朝日式は太頸壺、細頸壺、無頸壺（および台付き無頸壺）、鉢、浅鉢、台付き鉢、高杯等からなる。遠賀川系土器と異なり甕蓋はなく、その状況は凹線紋系土器期まで解消されない。

太頸壺は筒状の頸部に外反する口縁部をもつものと口縁部が外反せず筒状に立ち上がるものを主に、受け口状や袋状もわずかにある。壺は口頸部高と体部高の比率が１期には同比だが、２期には体部が肥大化して貝田町式につながる。細頸壺は出土頻度が少ないが、直線的な口縁部で受け口状をなすことはない。むしろ、受け口状口縁の無いことが貝田町式との差異である。鉢は壺体部成形段階に相当し、浅いものと深いものがある。浅鉢には沈線で幾何学紋が施される精製品があり、系譜が問題になる。台付き器種には無頸壺もあるが、多くは朝日式２期に出現する。

壺を始めとする有紋器種は、貝殻描紋が中心の前半（朝日式１期）と櫛描紋が目立つ後半（朝日式２期）に区分できる。

朝日式１期は、さらに壺に沈線紋を残す前半と喪失する後半に区分できる。朝日式１期の貝殻描紋はほとんどが条痕紋系土器に比べて細密の肋条をもつ二枚貝を原体とし、同時期の条痕紋系土器とは明らかに異なる。壺紋様は頸部と体部の直線複帯２段構成を基本とし、遠賀川系土器の紋様帯を継承している。少ない単帯構成は波状紋との組み合わせが基本となる。施紋は右回りで、弧状の静止痕を残すものは二枚貝腹縁を器面に当てていることを、それより１帯あたりの幅が狭く静止痕の無いものは二枚貝背面を当てていることを示す。

朝日式２期には近畿第Ⅱ様式に比較可能な櫛描紋が現れるが、波線の組成率も明らかに上昇するなど字義どおりの櫛描紋が成立する。引き続き貝殻描紋も盛行し、単体や破片では時期判定に困る場合があるとはいえ、１期にもまして幅の狭い細密な条線もあり、波線の多様を含めて櫛描紋の影響が色濃い。

朝日式１期以来の直線単独構成は太頸壺や細頸壺に特徴的で、また体部が肥大化して波線を組み合わせるものが現れるが比率は低い。反面、無頸壺、台付き無頸壺、鉢、浅鉢（台付き鉢？）には後者が目立つ（図１)。

三角形刺突紋や横型流水紋、[直線＋波線＋直線] 単位紋はこの時期に明確になる（図２)。[直線＋波線＋直線] 単位紋は、壺・無頸壺・鉢などに施され、日本海側地域の櫛描紋との関係が窺える。頸部直下の段はこの時期にも一定量あり、その形骸化である沈線は少ない。

朝日式に伴う研磨沈線で幾何学紋を施した浅鉢には斜線帯や綾杉紋をもつものがあり、全面研磨の黒色焼成で、大地形土器とも無関係ではないだろう。縄文晩期以来の精製鉢の系列が取り込まれた観もあるが、技術系列上は朝日式の壺系列に含まれる。ただ、出土例が朝日遺跡に限られているとなれば、この部分は金剛坂式と無関係であり、むしろ濃尾平野における土器環境の個性を表現していると考えねばならない。つまり、浅鉢の象徴性を継承する基盤が（おそらく晩期後葉以来）濃尾平野に存在したのであり、それが朝日式成立とも無関係はないということだ。

さて、朝日式の出自は明らかに金剛坂式土器

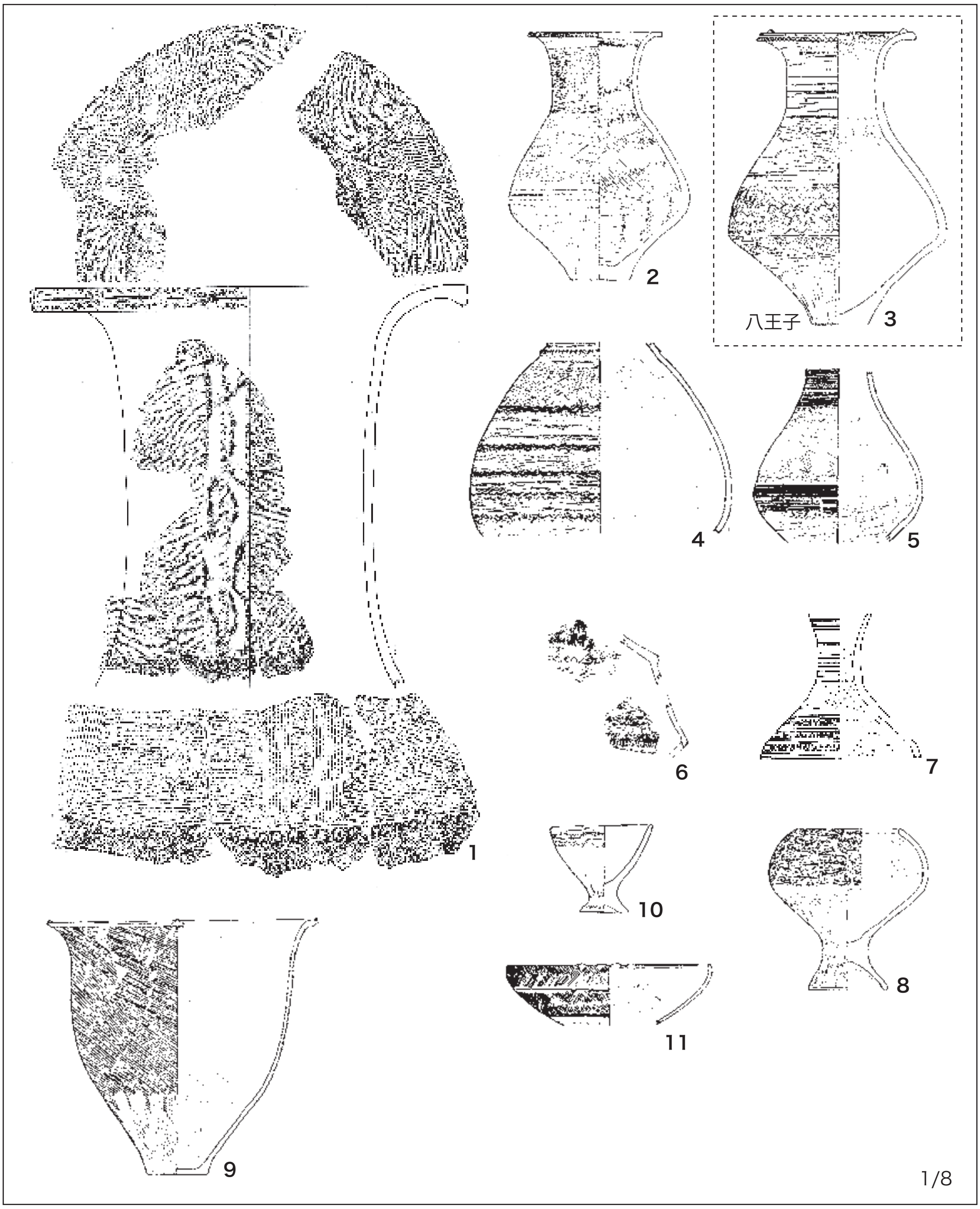


図１　朝日遺跡他の朝日式２期：壷は櫛描紋グループ

にあると考えられているが、残念ながら本拠地であるはずの伊勢湾西岸域でいささかの課題を残す。濃尾平野北部（や、おそらく西部）では金剛坂式甕の最末型式が中期初頭にも存続しているが、西岸域では金剛坂式分布圏の中心である西岸域南部でも不明である。次段階への移行が全域的ではなくかつての分布圏周辺で起きたのなら、その核心に濃尾平野の朝日遺跡が関与していた可能性も貝殻描紋の盛行からいって高いはずである。

系譜関係をよく示すとされる壺に頸部の突帯はないが、口縁部内面にユビ沈線が施された壺が朝日遺跡から出土しており、また中村友博が注目した壺頸部紋様帯直下の段に加えて、口縁

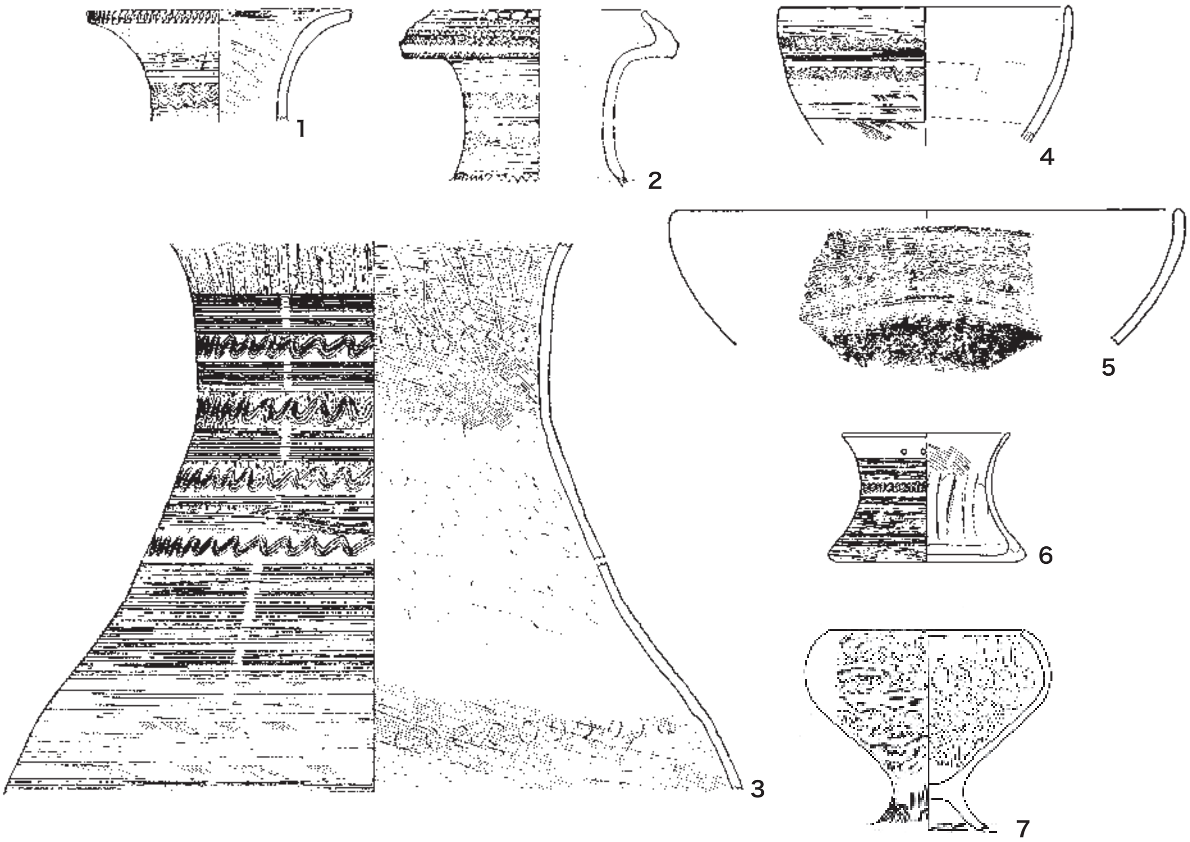


図２　朝日遺跡の朝日式２期：［直線＋波線＋直線］単位紋をもつ諸器種

部の連続指押圧などの特徴に金剛坂式からの系譜をみることができる。ところが､甕になると、濃尾平野では強く屈折する口縁部の４ヶ所にユビ圧痕、もしくはユビ摘みを加え、底部外面にミガキを施し、体部を縦ハケメで仕上げる金剛坂系甕と、その後さらに二枚貝による斜位条痕で器面を仕上げる朝日形甕が東部の朝日遺跡周辺に、他方口縁部の外反がゆるく口縁部の４ヶ所にユビ摘み、体部外面に二枚貝縦位羽状条痕を施す須ヶ谷形甕が西部の稲沢市須ヶ谷遺跡周辺に分布しており、西岸域はほぼ全域が「大和形甕」に類似する粗ハケ甕で占められて、結果、西岸域から濃尾平野にかけては甕によって朝日式圏が３分されるというように、弥生前期末から弥生中期初頭にかけての金剛坂式要素の分布動態は大きな変化をみせている。

伊勢湾岸域を中心において [壺：広分布圏][甕：狭分布圏] という広／狭の関係に置き換えれば、いちおうは西の櫛描紋、東の条痕紋に対する「貝殻（櫛）描紋」圏として朝日式圏は成立するのだが、しかし粗ハケ甕が朝日式壺の分布圏西部におさまることなくさらに西や北へ大きく延びている点は、前期末から中期初頭の動態を外部との関係で評価する必要性を示しており、中村友博の構想とも重なる。

粗ハケ甕は大和盆地では「大和形甕」と呼ばれているが、体部外面に縦ハケメ、口縁部内面に横ハケメを施す甕は、ハケメの粗さの程度を別にすれば京都盆地から琵琶湖周辺、そして伊勢湾西岸域と広域に分布しており、弥生中期中葉：貝田町式期になって京都盆地から琵琶湖周辺域で波状紋などの装飾や波状口縁が、同時に伊勢湾西岸域でも直線紋や波状口縁などの独自性が現れる。当初は壺と甕で分布の重心がずれていたが、後に両者が一体化する基本的な方向を重視すれば、朝日式として括ることに問題はなかろう。中期初頭における土器相とは、非遠賀川系土器の型式学的ネットワークの再編成として現れたものであり、朝日式（や貝田町式）はその一環であった。

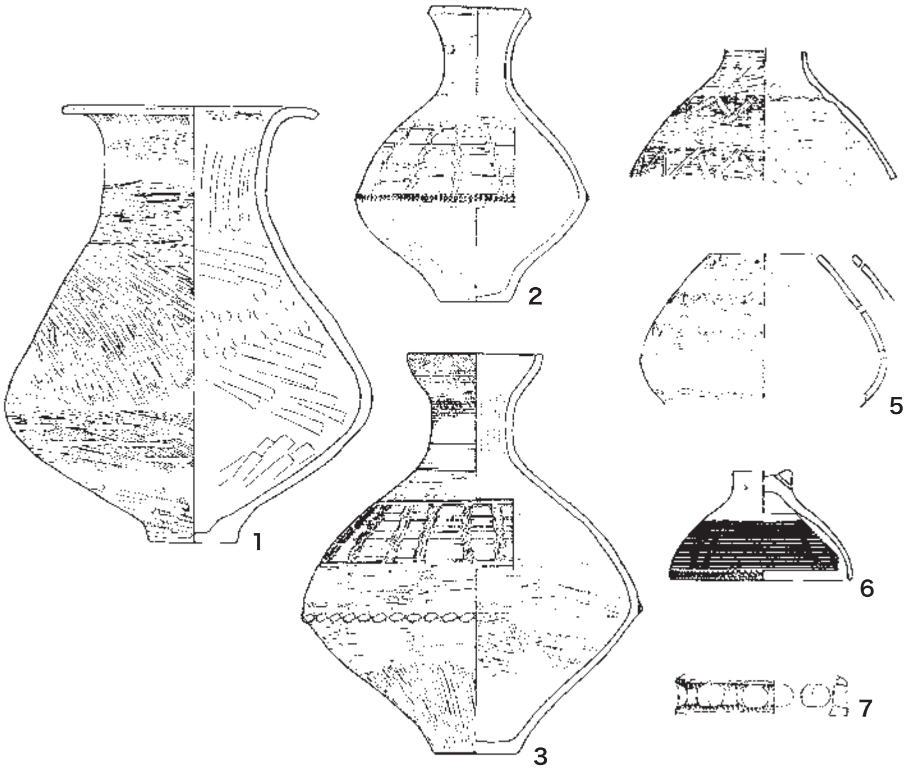


図３　朝日遺跡の貝田町式１ａ期の主要器種

2. 貝田町式

貝田町式は朝日式２期を継承しつつ新たな要素の出現や他系譜の取り込みによって再編成された型式である。最古段階である貝田町式1a期の資料は朝日遺跡周辺を除くと不明確で、その内容も現状では決して安定したものではない。なお、議論が必要である。太頸壺、細頸壺、無頸壺、短頸壺、高杯、甕を主要器種とし、鉢、浅鉢、台付諸器種を伴う（図3）。

高杯は脚端が屈折して高台状に立ち上がるのが基本のようだが、なかには大きく立ち上がり側面に円形透孔をもつものもあるが出土頻度は低い。原型が木製品であることが形態的な変異幅の広さの背景であろう。浅鉢には朝日式以来の幾何学紋をもつ黒色焼成のものや、鉢のうち底部周囲を高台状に突出させて紐穴２ヶ１対を底部側面から底面に向けて斜めに２セットずつ対向して穿ち、浅鉢のように沈線紋を施す黒色焼成の器種も朝日遺跡に顕著である。朝日遺跡で認められた浅鉢→無頸壺（→短頸壺）→細頸壺の系統的器種分化は他の遺跡では不明確で、しかも丁寧な研磨と黒色焼成によって括ることのできる短頸壺や上記の鉢も朝日遺跡に収斂する傾向をみせる。

指標になる典型的な細頸壺（貝田町式1b期）の諸属性には、

① 口縁部上端の刻み、②口縁部外面の浮紋、③口縁部屈曲部の刻み、④拓本の取りづらい細密の櫛描紋、⑤櫛描紋の体部複帯構成、⑥櫛描紋帯の縁取り沈線と無紋部の研磨（付加沈線研磨手法）、⑦体部屈曲部の刻み突帯、⑧底部の突出の他に、⑨黒色焼成に赤彩、⑩頸部の刻み突帯、⑪体部櫛描紋帯上の浮紋、

等がある。

①②③⑧⑪は岩滑式：条痕紋系土器、⑤⑦は朝日式：櫛描紋系土器に辿ることができ、両者の融合が窺われる（が、そもそも貝田町式の基本紋様である④⑥⑨は両者から系譜が引けず、だから独自な要素と考えられたが、以下ではその点を問題にする）。

体部下半の地の調整は、研磨仕上げが丁寧な場合には観察することも難しいが、多少ミガキ

が粗い場合には二枚貝調整が認められる例もある。

貝田町式の主要器種である細頸壺は体部の櫛描紋様が複帯を基本にしている。複帯の中身を見れば、貝田町式1a期には[櫛描紋帯4帯以上：1段]と[櫛描紋帯2帯～3帯：2段]の二つがあり、「付加沈線研磨手法」は後者の基本属性で、その後多段化していく主系列となる。朝日式2期の紋様構成を引き継ぐのは前者だが、流水紋の崩れは早い。後者では貝田町式に特徴的な擬流水紋や黒色焼成が存続するというように、両者は一系列の連続ではないようだ。つまり、貝田町式1a期には朝日型櫛描紋が収束して貝田町型櫛描紋が成立し、貝田町式1b期には主系列の多段化傾向が明確化する。浅鉢を含め複数器種に黒色焼成が及び、貝田町式1a期のうちに浅鉢→無頸壺→細頸壺のラインと黒色焼成が確立したと考えられる。

貝田町式を特徴づける縄紋も貝田町式1b期以降に盛行し、西岸域にも分布する。付加紋に沈線を多用するものは西岸域産であろう。また、櫛描紋に縄紋を組み合わせる紋様構成も西岸域にあり、ハケメ紋土器に繋がる。

壺の広がりは濃尾平野から伊勢湾西岸域に及ぶが、甕が異なる点で、朝日式の精・粗に関わる地域差が引き継がれている。甕は、伊勢湾西岸域中南部では朝日式同様に粗いハケメ仕上げが主であるのに対して、濃尾平野では金剛坂式系のハケメ甕が衰微して朝日形甕の系譜が朝日遺跡を中心にして、濃尾平野西部では須ヶ谷形甕の系列が並行して存続する。さらに、濃尾平野南部には伊勢湾西岸域とは異なり体部の張るハケメ甕に二枚貝条痕を重ねるものがこの時期に明確化して両分布圏に重なる。

このように、濃尾平野では朝日形甕・須ヶ谷形甕が東西に並存して10km圏の分布圏を有し、それぞれ固有の範囲で生産されたことは明らかである。これらに重なる縦ハケメ甕には西岸域北部と共通して搬入品と濃尾平野西部産の両者があり、そして二枚貝仕上げハケメ甕は濃尾平野南部の何処かで製作された。

壺は、細頸壺の共通性が西岸域と濃尾平野で高く、さらに太平洋側や日本海側などの外部地域に搬出される。太頸壺には受口状口縁があり、口頸部紋様や付加紋に沈線が多用されるなど濃尾平野との差異も認められる。同類は琵琶湖岸域にも分布している。

浅鉢は無紋・有紋を問わず西岸域でほとんど確認できず、生産されていなかった可能性が高い。この点は朝日遺跡を除く濃尾平野の諸遺跡でも同様である。朝日遺跡に浅鉢→無頸壺（→短頸壺）→細頸壺の系列が認められるに過ぎず、そのほかではせいぜい時間的に下って無頸壺→細頸壺の生産が想定できるにすぎない。朝日遺跡や名古屋城三の丸遺跡下層以外では共伴する無頸壺と細頸壺の紋様構成上の不整合が認められる点からも、貝田町式細頸壺系列はある段階まで朝日遺跡に生産が集中していた可能性が高い。

貝田町式は壺群における紋様構成上の共通性や要素の互換性、また甕の分布の重なりによって、近畿諸様式や瓜郷式等と区別される。細頸壺は全域の共有器種であり、受口状口縁太頸壺は伊勢湾西岸域の専有器種、浅鉢や円窓付土器は朝日遺跡の専有器種である。この両者の間を広狭のレベルが重なり合いながら諸器種が分布していることになるが、濃尾平野の貝田町式壺の起源が朝日遺跡あることは間違いない。そして先に朝日遺跡で認められた浅鉢→無頸壺→細頸壺の工程が完全な段階には、それらは朝日遺跡の専有器種になる。であれば、その分布は朝日遺跡産の分布を示しているということになる。この点で、体部内面にツメ痕を残す細頸壺も朝日遺跡産の一つの指標になる可能性がある。一方、伊勢湾西岸域の受口状口縁太頸壺はすでに祖形が朝日式2期にあり、貝田町式段階に分岐したものではない。よって、貝田町式の東西差は前段階を継承したものといえる。

貝田町式細頸壺が共有器種であるのはあくまで消費面においてであり、始まりは専有型式である。共有器種と専有器種の論理的位置づけが難しいのは範疇が動態だからである。この点は在来・外来区分についてもいえる。

3. 条痕紋系土器

朝日式に並行する岩滑式は分布圏の東西で樫王式・水神平式同様に条痕原体が異なる（矢作川流域以西：二枚貝、豊川流域：櫛）が、ハネアゲ紋などの紋様構成に大差はなく、以東の丸

子式とは明確に区別される。岩滑式３期には濃尾平野北部から内陸部において新たに櫛条痕系（「野笹類型」）が成立する。

岩滑式太頸壺の型式変化は、太頸壺の口縁部、頸部の紋様構成に明確である。端的に言えば、口縁部直下の条痕が横位→ハネアゲ紋となり、口縁部上端に凸帯が付設されて [低い受け口→高い受け口→上端が内傾] というように受け口状口縁を成長させるとともに、受け口部外面も押し引き→斜条痕→連弧紋施紋というように紋様帯化する。とくに最終段階には、口縁部や頸部の条痕を磨り消して半截竹管紋や二枚貝背面擬縄紋などの紋様を施す「岩滑式Ｂ類」が成立して、続条痕紋系土器への端緒となる。

岩滑式には、遺跡によって①大地形土器、②充填縄紋や二枚貝背面による充填擬縄紋が施される壺、③半截竹管などによる平行線紋が施される壺・無頸壺、④工字紋をもつ赤彩鉢など、多様な器種が共伴する。

①は深鉢形から壺形まで幅がある。このうち、綾杉紋系列は北陸の「柴山出村式」に類似している。いずれも煤が付着し火にかける用法が基本で、内部に固形物を残す資料もある。伊勢湾奥部から北陸にかけて広範囲に分布し、伊勢湾西岸域や愛知県東部・矢作川以東ではほとんど出土しない。

②は受口状口縁壺や袋状口縁壺があり、形態は条痕紋系土器に共通する。体部下半に二枚貝条痕を残し、体部上半は器面をナデで無紋にし、沈線や半截竹管で区画し、縄紋（擬縄紋）施紋部と無文部を配する。コ字状紋や王字状紋もある。体部下半と体部上半から頸部を条痕／無紋で仕分ける手法の始まりで、続条痕紋系土器に継承される。

③は朝日遺跡で特に目立つ。壺は袋状口縁をもち、体部下半に二枚貝条痕、体部上半から頸部は櫛描紋構成と同じように直線紋帯を配して、その間を無紋帯とし半截竹管の平行線による波線で縁取る紋様手法が一定程度認められる。②と同様に、体部下半と体部上半から頸部を条痕／無紋で仕分ける。無頸壺は条痕を消し去り、半截竹管の平行線で流水紋を施すものが

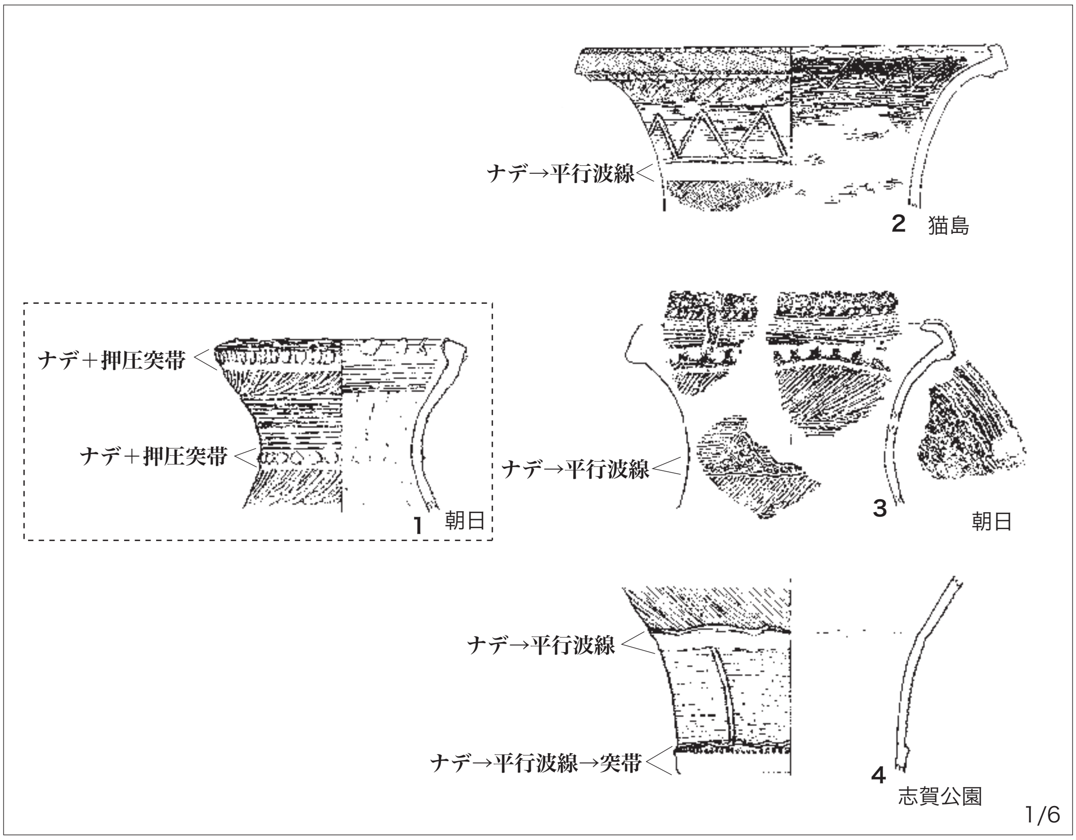


図４　岩滑式３期の変異１

ある。部分的に二枚貝背面擬縄紋が充填されて、②との関係も認められる。

④には鉢というよりは口縁がすぼまって無頸壺といった趣の形態もある。幅広い沈線で工字紋が施されており、赤彩を含めて北陸のユビ沈線と無関係ではないだろう。

上記のうち②は矢作川流域でも認められるが、豊川流域では未確認である。朝日式と岩滑式の接触圏に成立する中間相ともいえる土器群であり、だからそれをわたしは「岩滑式Ｂ類」と呼んだ。重要なのは連続性の有無を別にして中期中葉にも擬縄紋系列として続条痕紋系土器内に存在していることである。

Ⅲ 岩滑式３期の型式変異

1. 全面条痕紋

太頸壺には単純口縁、受け口状口縁、袋状口縁の３種がある。細頸壺や無頸壺は無い。他に厚口鉢がある。単純口縁壺はほとんどが押圧突帯を脱落させているが受け口状口縁には突帯が存続している。袋状口縁はこの時期に現れる器種で、もともと押圧突帯は無い。半截竹管の平行線紋を横位条痕帯に重ねて波状の付加紋とするものが多く、条痕のみの施紋を探すのは難しい。西尾市岡島遺跡には横位条痕帯を平行波線で縁取るものもある（図5-9）が、ハネアゲ

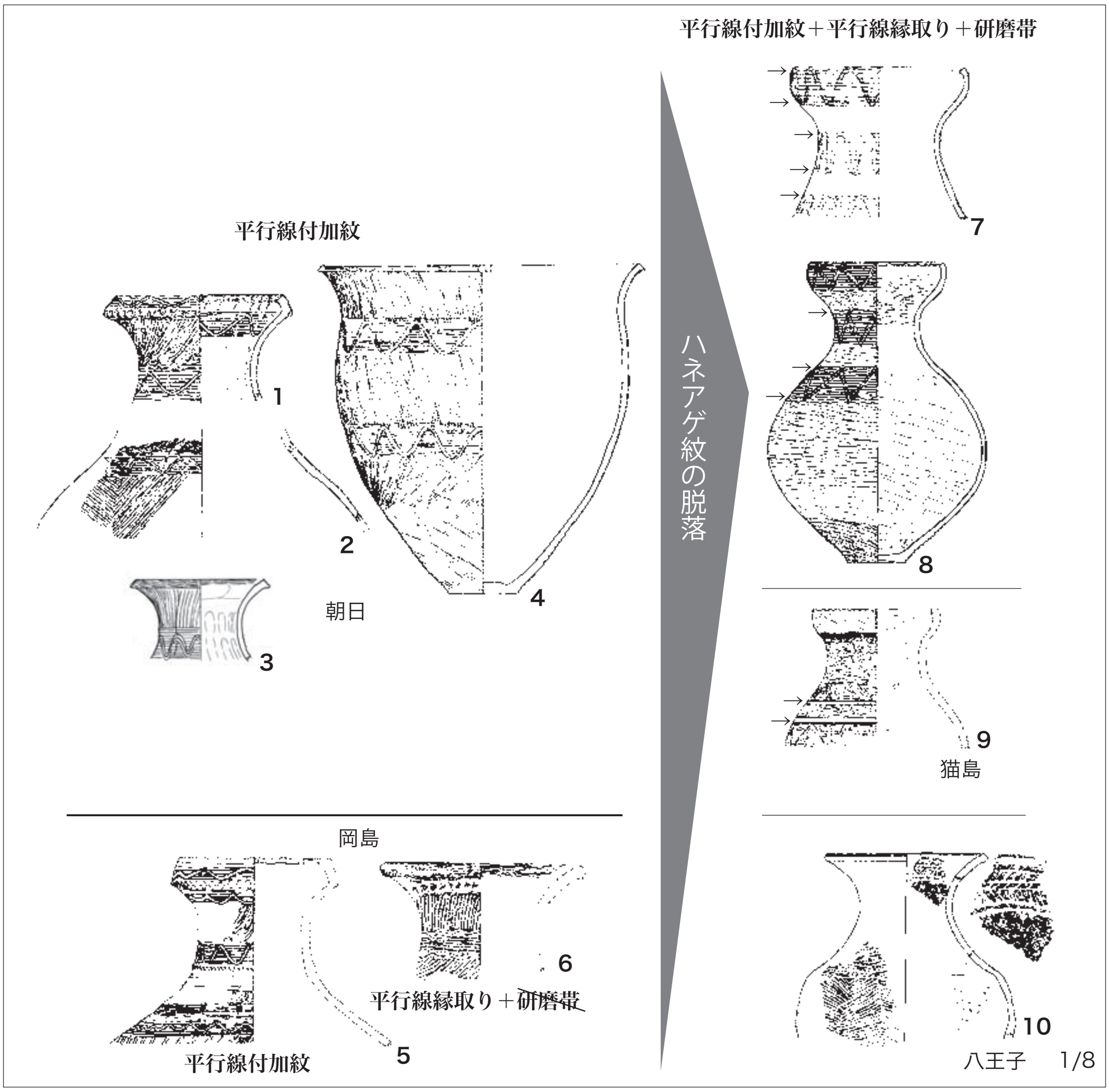


図５　岩滑式３期の変異２

紋を脱落させれば研磨無紋帯グループになる資料である。矢作川流域にハネアゲ紋を脱落させる資料は無いようで、研磨無紋帯の成立は濃尾平野に限定できる。

甕は口縁部に押し引きを施すものが濃尾平野から矢作川流域の内陸部にかけて、条痕を施すものが濃尾平野南部から矢作川流域の湾岸域にかけて微妙に分布圏がずれている。体部の調整は、縦位羽状条痕を施すものは前者、左上がりの斜条痕は後者に組み合う。

2. 無紋帯

(1) ナデ無紋帯（図 4）

受け口状口縁太頸壺に限定され、頸部に半截竹管の平行線で縁取られるナデによる無紋帯を1帯挿入するもので、朝日遺跡、一宮市猫島遺跡、名古屋市志賀公園遺跡に類例がある。朝日遺跡出土の図 4-1 は口縁部の形状が図 6-1・5 に類似するもので、岩滑式の受け口状口縁とは些か趣が異なる。口縁部と頸部のハネアゲ紋上縁を横ナデして押圧突帯を貼付けている。しか

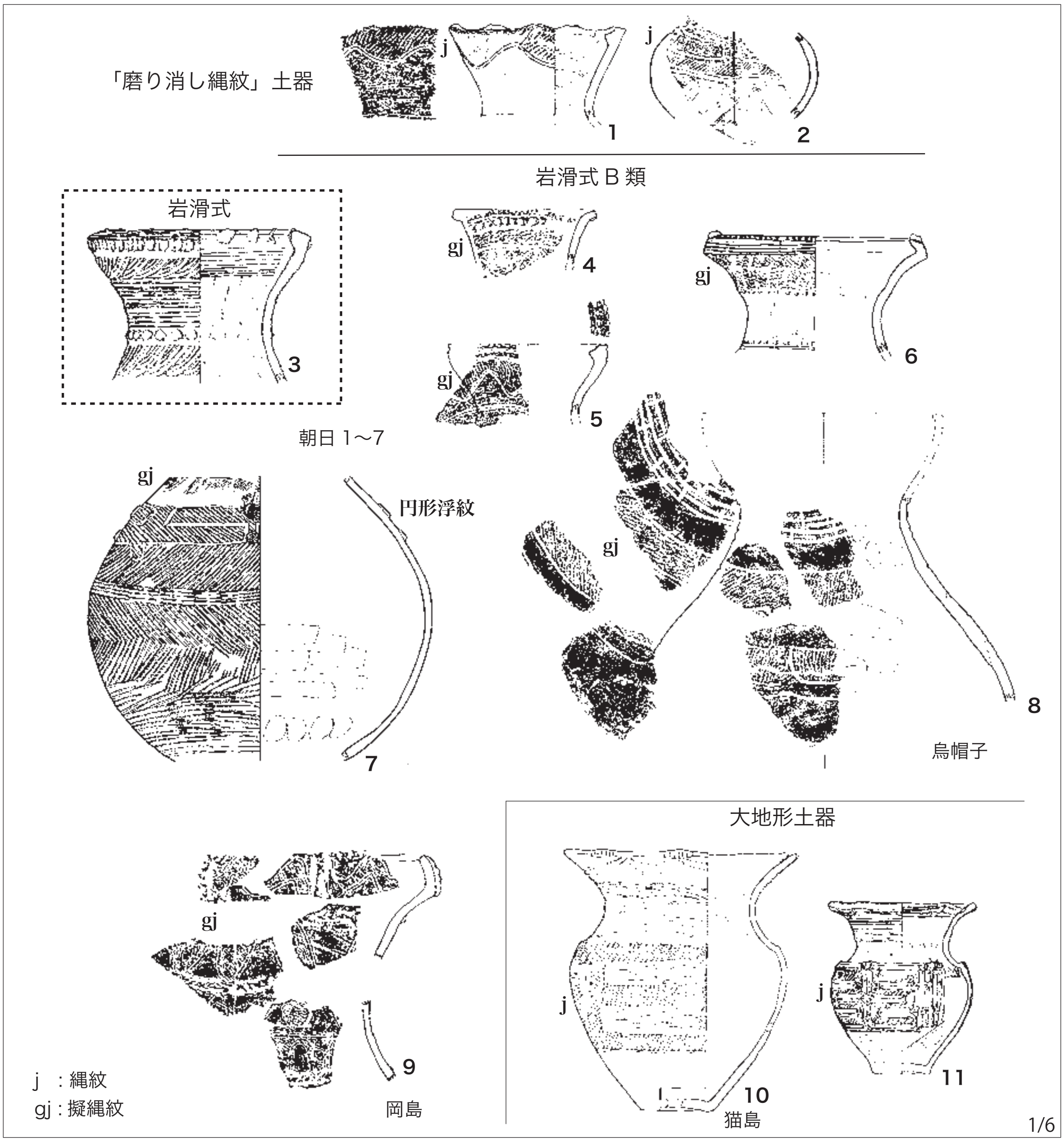


図 6　縄紋・擬縄紋をもつ土器の相関

し、ナデ無紋帯はその延長ではない。むしろ、図 4-3 の無紋部は部分的に拡張されており、図 6 の磨り消し縄紋・擬縄紋グループとの関係が気になる。

（2）研磨無紋帯（図 5）

壺体部上半から頸部に直線紋帯と無紋帯を交互に配置し、紋様界に半截竹管の波線を加えるもので、袋状口縁がほとんどである。上述したように岡島遺跡資料（図 5-9）はハネアゲ紋を無紋帯に変換すれば成立する紋様構成であり、濃尾平野、とりわけ朝日遺跡での出土頻度が高い。縁取りの平行直線は一例だが猫島遺跡から出土している。半截竹管を反転させれば沈線となり、貝田町式の「付加沈線研磨手法」との関連を窺わせる。

なお、一宮市八王子遺跡では体部下半に条痕調整を限定して体部上半から頸部にかけて条痕を脱落させ、半截竹管紋を施す壺（図 5-10）が出土している。口縁部内面にも半截竹管で直線と斜行単線の組み合わせを 2 段施している。様相としてハネアゲ紋を脱落させた研磨無紋帯グループに近いが、体部を上下に 2 分する紋様構成は続条痕紋系土器的で、「磨り消し」縄紋グループ的でもある。体部が縦位羽状条痕とはいえ、貝田町式 1a 期の並行関係を見すえるなら帰属に悩む資料である。

3.「磨り消し」縄紋・擬縄紋グループ（図 6）

完全な形の資料は少ない。口縁部を含む上半部をナデ仕上げの後に沈線や半截竹管で区画（王字、コ字、E 字等）して部分的に縄紋・擬縄紋を施すもので、正しくは「磨り消し」ではない。体部の下半部は二枚貝条痕を残すものとミガキ仕上げとがあるが、図 5-8 のように底部付近に条痕が限定される場合があれば、体部片では判別が難しいことになる。口縁部は袋状に内湾するか内面に突帯をめぐらした波状形態が優勢のようで、擬縄紋系は朝日遺跡から知多半島にかけての伊勢湾岸よりに分布して、海産資源と親和的である。

体部の紋様パターンではなく表出手法が大地形土器と共通しており、濃尾平野でも出土するが主系列は矢作川流域の可能性があることから、条痕紋系土器の壺に大地形土器紋様が取り込まれたものと考えられる。

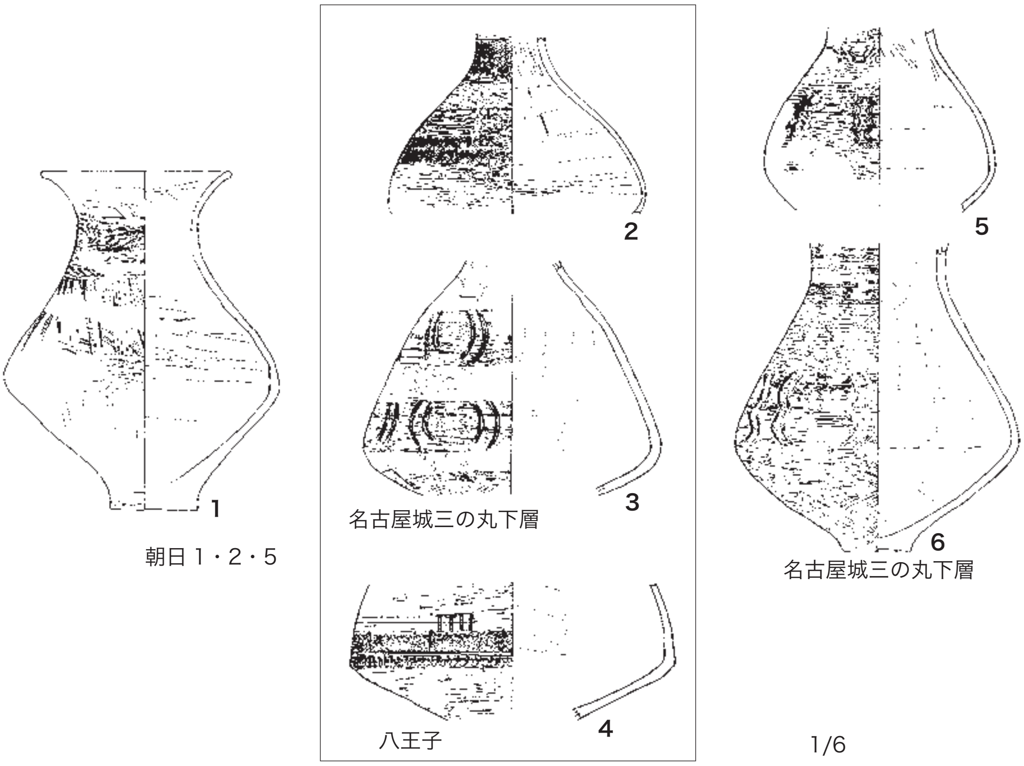


図 7　貝田町式 1 a 期の［直線 - 波線 - 直線］単位紋

Ⅳ 貝田町式紋様の再検討

(1) 朝日式からの連続と不連続（図 7）

朝日式から貝田町式への移行は従来、連続を基本に考えられていた。器種組成、製作技法、分布において朝日式と断絶するような部分は無いからである。朝日式２期を継承しつつ「付加沈線研磨手法」の成立によって貝田町式の成立が窺えるのが貝田町式 1a 期である。ただし、貝田町式 1a 期の諸器種のうち、壺類については紋様上も帰属型式は明確だが、甕や浅鉢については単独では朝日式２期との識別は困難である。そこに連続と不連続がある。つまり、複合する要素の連続を基盤に不連続の要素によって両型式は区分されるというわけである。

朝日式は１期の貝殻描紋から２期の櫛描紋に移行しても、壺は頸体部の複帯２段構成と少量の単帯多段構成の２系列が、その他の器種では後者が存続し、そして直線２帯の間に波線を挟む [直線＋波線＋直線] の単位紋（も櫛描ではなく貝殻描の場合には非常に細密な条線を残す原体の背面が用いられる）が壺他の有紋諸器種に散見される。

貝田町式になると単帯多段構成が鋸歯紋以外は消失してほとんど複帯２段構成に限られるが、貝田町式 1a 期については確たる資料は無い。少ない資料からみれば、壺頸部の段は沈線となることで消失し、後に二枚貝刺突紋が出現する。三角形刺突紋は壺の頸部以外でも境界紋様として施されているようだが、1b 期には太頸壺の口縁部内面や高杯杯部内面の紋様に転換するというように、有紋器種の場合には 1a 期の中で紋様構成の再編集が行われている可能性がある。

壺体部櫛描直線紋の複帯２段構成には縁取り沈線の有るものと無いものがあり、前者は貝田町式の指標となるが、後者は朝日式２期を継承していると評価される。貝田町式に継承される [直線＋波線＋直線] の単位紋はこれまでのところ、伊勢湾西岸域では津市替田遺跡の１例、濃尾平野では朝日遺跡、名古屋城三の丸下層、八王子遺跡の３例と僅かしかないが、いずれも縁取り沈線はない。

そして、朝日式２期に特徴的な、体部櫛描紋帯に半円紋を縦位に連ねる流水紋は貝田町式 1a 期には連続する縦位弧線、さらには縦位波線となり流水紋構成は逸早く崩れてしまう。その後に複帯櫛描紋帯全幅に施される相対弧線が貝田町式壺の典型紋様として擬似流水紋と交替することになる。流水紋・縦位弧線・縦位波線の３者は変異ではなく一連の型式学的変化として現れており、それを加速させたのが朝日式以来の複帯構成であった。もともと流水紋は単

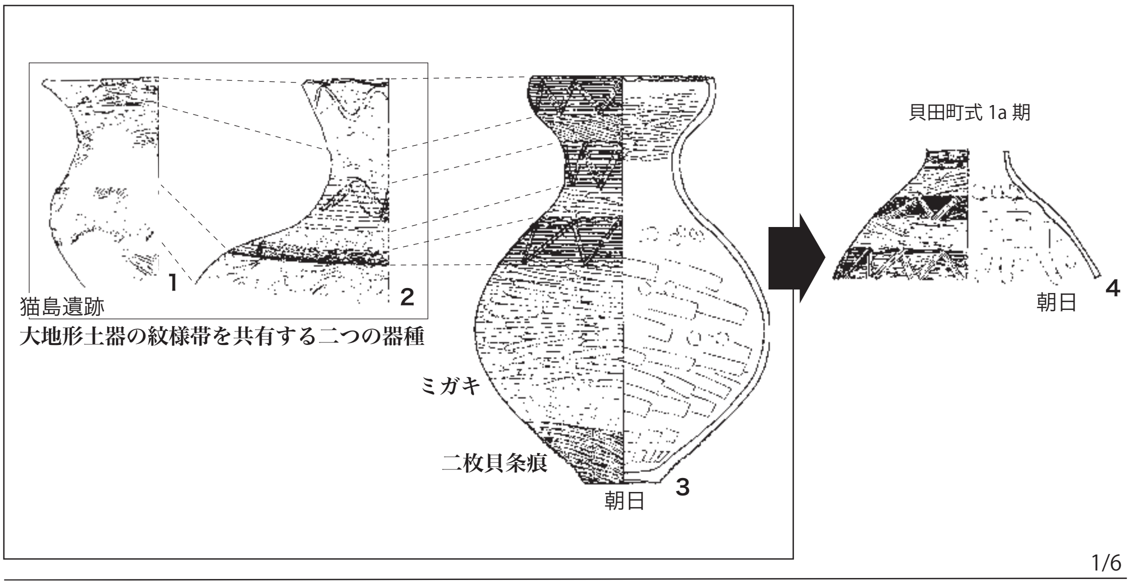


図８　大地形土器からの連関

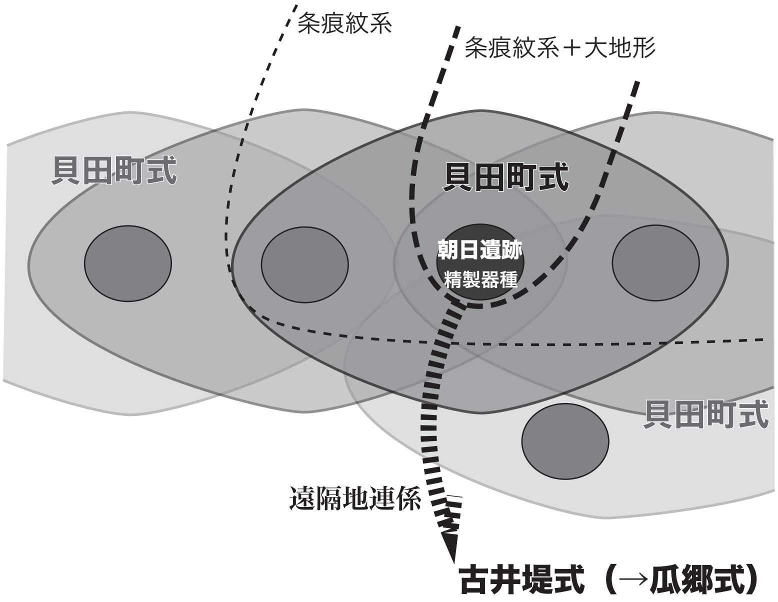


図９　貝田町式１期の型式観

帯を基本とする紋様であり朝日式以降の複帯構成には不適合な紋様であったことがそうした変化を生み、ゆえに外来紋様の在来化とはすなわち折衷型の形成であったといえる。

有紋器種群は朝日式２期になると貝殻描紋に櫛描紋が加わる、あるいは貝殻描紋と櫛描紋の相互影響によって型式学的には拡散する状況が生じる。それが貝田町式には型式学的な収束に向かう。まず黒色焼成を特徴とする浅鉢→無頸壺→受け口状口縁細頸壺の系統的器種分化、そして「付加沈線研磨」手法である。前者は朝日式の浅鉢を取り巻く環境の鮮明化といえ「精製器種」の継承である。朝日遺跡では高杯、台付鉢など多くの器種の黒色焼成や特有の紋様が及び、精製器種の範囲は広い。朝日遺跡 10km 圏とそれ以外における精製器種の保有形態の差異は明確で、離れるに従い器種は脱落して、遠方では細頸壺に収束する。

いっぽう、「付加沈線研磨手法」は朝日式に原型はなく、新たに成立したと考えられてきた。問題は生成過程である。

(2) 貝田町式壺類「付加沈線手法」の生成過程

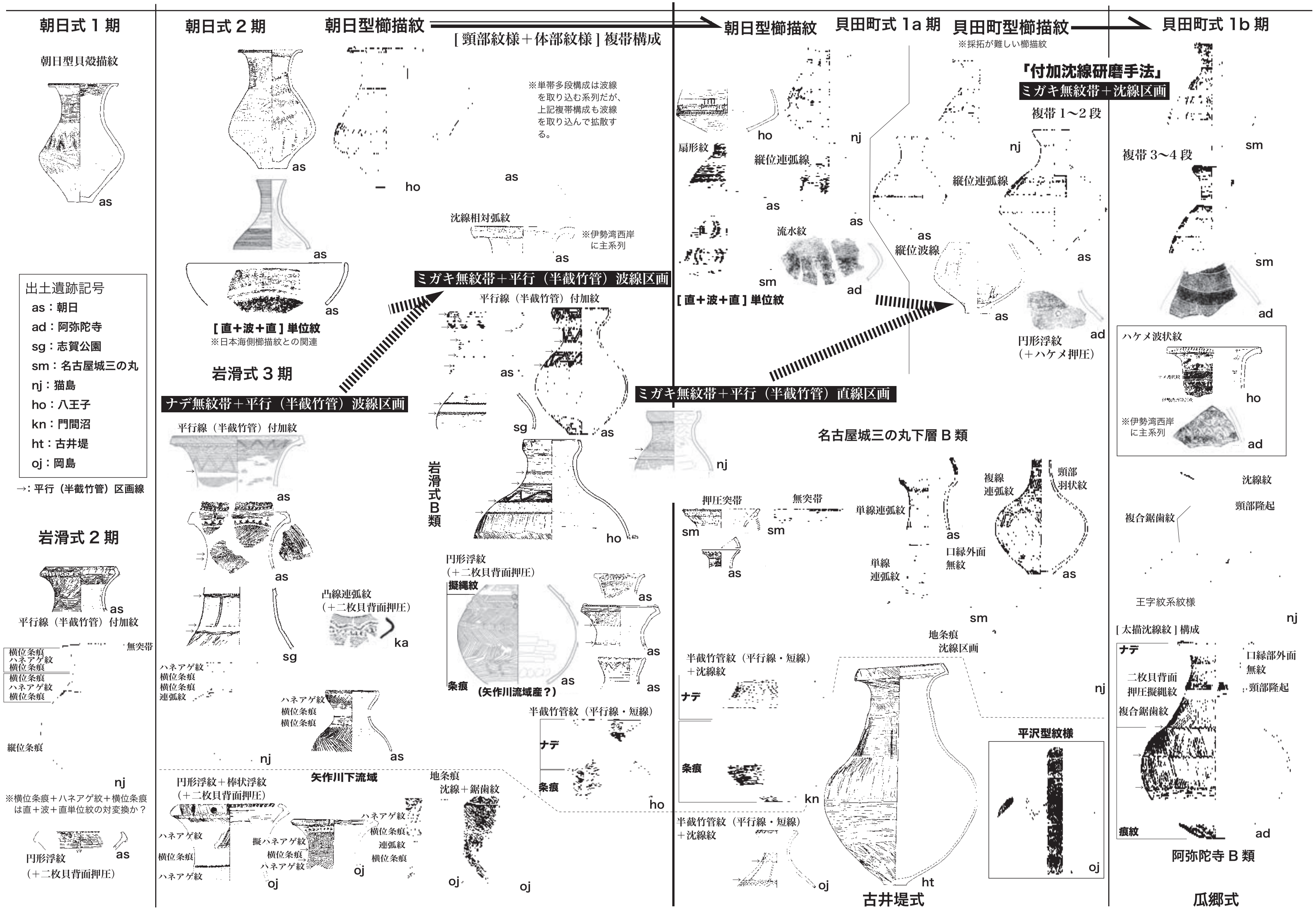
貝田町式の「付加沈線研磨手法」の出自について、上述のように岩滑式３期の研磨無紋帯に求めてみた。「付加沈線」となるには竹管の半截内側：平行線から半截外側：沈線への反転という１段階を経る必要はあるが、この場合には型式変化が急激に進むが故に資料が少ないこと、朝日遺跡という特定の遺跡で型式変化が起った可能性が高いこと、言い換えれば折衷型土器の動態に型式変化の収束点が見えてきた、と指摘できる。“型式”の生成が安定した型式変化の中ではなく、その界にあること、つまり折衷型のうちにあるということを「付加沈線研磨手法」はよく示している。

あるいは、折衷型を対象化できるのが求心的視点であり、それに対して生成の対象化には遠心的視点とともに型式学的ネットワークを必要とする。その型式学的ネットワークにおける一過性の収束点として、同時に多系の共存と交流を反映する折衷型土器が連続的に生産される場である朝日遺跡を軸とする諸関係を示している（図８・９）。

Ⅴ あとがき

中期前半における土器の型式学的変遷の全体を対象化することは当然であるが、それを総て表現するには膨大な紙幅が必要となる。今回も肝心な部分に限定して提示した。

図 10 では「付加沈線研磨手法」の生成を軸に他の諸系の動態も加えた。型式学的には朝日遺跡を母型として影響圏および周辺、さらに外縁という重層的なネットワーク関係（いわゆる



朝日式 1 期
朝日型貝殻描紋
出土遺跡記号
as：朝日
ad：阿弥陀寺
sg：志賀公園
sm：名古屋城三の丸
nj：猫島
ho：八王子
kn：門間沼
ht：古井堤
oj：岡島
→：平行（半截竹管）区画線
岩滑式 2 期
平行線（半截竹管）付加紋
無突帯
横位条痕
ハネアゲ紋
縦位条痕
※横位条痕＋ハネアゲ紋＋横位条痕は直＋波＋直単位紋の対変換か？
円形浮紋
（＋二枚貝背面押圧）
朝日式 2 期
朝日型櫛描紋
[頸部紋様＋体部紋様] 複帯構成
※単帯多段構成は波線を取り込む系列だが、上記複帯構成も波線を取り込んで拡散する。
沈線相対弧紋
※伊勢湾西岸に主系列
[直＋波＋直] 単位紋
※日本海側櫛描紋との関連
岩滑式 3 期
ナデ無紋帯＋平行（半截竹管）波線区画
ミガキ無紋帯＋平行（半截竹管）波線区画
平行線（半截竹管）付加紋
岩滑式 B 類
凸線連弧紋
（＋二枚貝背面押圧）
円形浮紋
（＋二枚貝背面押圧）
擬縄紋
条痕
（矢作川流域産？）
半截竹管紋（平行線・短線）
ナデ
連弧紋
矢作川下流域
円形浮紋＋棒状浮紋
（＋二枚貝背面押圧）
地条痕
沈線＋鋸歯紋
朝日型櫛描紋
貝田町式 1a 期
貝田町型櫛描紋
※採拓が難しい櫛描紋
扇形紋
縦位連弧線
流水紋
[直＋波＋直] 単位紋
縦位波線
「付加沈線研磨手法」
ミガキ無紋帯＋沈線区画
複帯 1～2 段
円形浮紋
（＋ハケメ押圧）
ミガキ無紋帯＋平行（半截竹管）直線区画
名古屋城三の丸下層 B 類
押圧突帯
無突帯
単線連弧紋
複線連弧紋
頸部羽状紋
口縁外面無紋
単線連弧紋
地条痕
沈線区画
半截竹管紋（平行線・短線）
＋沈線紋
平沢型紋様
古井堤式
貝田町式 1b 期
複帯 3～4 段
ハケメ波状紋
※伊勢湾西岸に主系列
沈線紋
頸部隆起
複合鋸歯紋
王字紋系紋様
[太描沈線紋] 構成
口縁部外面無紋
二枚貝背面押圧擬縄紋
痕紋
阿弥陀寺 B 類
瓜郷式

図 10　貝田町式生成史

中心／周縁図式ではない）を図９でも示したが、それらが煩雑な印象を与えるのか、要点は掴めるものとなっているのか、新たな展開をもたらすのか、の評価は諸賢にゆだねたい。

なお、本稿は替田・弐之坪遺跡検討会および土器型式検討会での成果をもとにしている。石井智大、川崎志乃、福海貴子、川崎みどり、神谷真佐子、鈴木とよ江、藤田英博、永井宏幸諸氏から有益なご教示をえた。

参考・引用文献

石黒立人 1990「濃尾の弥生土器」『伊勢湾岸の弥生時代中期をめぐる諸問題』東海埋蔵文化財研究会
石黒立人 2008「貝田町式土器原論」『南山大学人類学博物館オープン・リサーチ・センター 2007 年度年次報告書付編　研究会・シンポジウム資料』
石黒立人・宮腰健司 1996「尾張」『YAY!　弥生土器を語る会 20 回到達記念論文集』弥生土器を語る会
池本正明 1993「岡島Ⅰ式〜Ⅴ式の設定」『岡島遺跡Ⅱ・不馬入遺跡』愛知県埋蔵文化財センター
神谷友和 1988「愛知県安城市古井堤遺跡出土の条痕文土器について」『古代』86、早稲田大学考古学会
紅村　弘 1958『名古屋市西志賀貝塚』名古屋市
紅村　弘 1963『東海の先史遺跡』総括編、名古屋鉄道株式会社
紅村　弘 1981『東海先史文化の諸段階　本文編』補足・改訂版
佐藤由紀男 1994「長頸壺の出現とその意義」『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集刊行会
鈴木とよ江 2002「三河地域」『東海地域の様式と編年』木耳社
田中　稔 1967「尾張における中期弥生土器の研究−朝日式について−」『古代学研究』第 47 号、古代学研究会
田中　稔 1968「尾張における中期弥生土器の研究−貝田町式について−」『古代学研究』第 51 号、古代学研究会
中村友博 1982「土器様式変化の一研究−伊勢湾第Ⅰ様式から伊勢湾第Ⅱ様式へ」『考古学論考』平凡社
永井宏幸・村木　誠 2002「尾張地域」『東海地域の様式と編年』木耳社
贄　元洋 1988「瓜郷式の再検討」『転機』２号
久永春男 1966「弥生文化の発展と地域性　三 東海」『日本の考古学』弥生時代、河出書房新社
愛知県教育委員会 1982『朝日遺跡Ⅳ』
愛知県埋蔵文化財センター 1990『阿弥陀寺遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター 1990『名古屋城三の丸遺跡Ⅰ』
愛知県埋蔵文化財センター 1993『岡島遺跡Ⅱ・不馬入遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター 1994『朝日遺跡Ⅴ』
愛知県埋蔵文化財センター 1999『門間沼遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター 2001『志賀公園遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター 2001『朝日遺跡Ⅵ』
愛知県埋蔵文化財センター 2001『八王子遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター 2003『烏帽子遺跡Ⅱ』
愛知県埋蔵文化財センター 2003『猫島遺跡』
愛知県埋蔵文化財センター 2008『朝日遺跡Ⅷ』
名古屋市教育委員会 2009『朝日遺跡』